

2019年2月17日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「‘非暴力’は‘無抵抗’ではない」

聖書：マタイによる福音書5:38～41

「悪人に手向かうな。むしろあなたの右の頬に平手打ちを加える者には、もう一方の頬をも向けてやれ」。このイエスの言葉は読む者に非常に驚きと関心を掻き立てます。ここから「理不尽な状況の中で、反論せず手をつかねてじっと耐え忍ぶ」のがクリスチャンの在り方、というキリスト教のイメージが広く浸透したかもしれません。キリスト教はそのような福音を利用して、植民地支配や奴隷制を支持してきた歴史もあります。

「目には目を、歯には歯を」という言い回しは本来、「やられたら復讐してもいい」という解釈ではなく「誰かの目をつぶしたら、加害者はそれ以上のものではなく同等のものをもって償う」という同害復讐法…法律に則ったものでした。これは当時ユダヤの人々の常識でした。しかしイエスの福音は人々の常識をはるかに超えていきます。

右の頬を打つには手の甲を使う必要があります。それは手のひらを使うよりも相手に二倍の屈辱を与えるやり方でした。権力ある者が自分の力を見せつけ、相手を貶めるためにこのように叩くということが日常的に行われていたのでしょう。左の頬を向けられては、屈辱を与えることは不可能です。相手に左の頬を向ける、とは決して暴力に対して屈しろと言うものではありません。むしろ、暴力的に襲い掛かってくる権力者の前に、力による抵抗を一切奪われた者たちに残された究極の手段…非暴力による抵抗、意思表示なのです。そして42節「…あなたから借りようとする者に、背を向けてはならない」というイエスの言葉から、抵抗するのは相手を支配するためではなく、対等で平等な関係作りをするためなのだということがわかります。

平和の主イエス・キリストは暴力に対して、暴力で応戦することを否定します。暴力を使うことは暴力を容認することになるからです。ですが聖書は、非暴力は無抵抗ではないことを示します。平和をつくりだす、ということは、うなだれて負わされた重荷や痛みにも必死に耐えてやり過ごすことではありません。私たちは誰かに対してそのような行動を暴力的に強制したくありませんし、また私たちに対しても、それが当然であるかのように強制的に誰かから負わされ続けたくありません。

決して暴力に操られずに、しかしあきらめずに抵抗していく力と希望をくれるのは私たちの救い主、イエス・キリストのみことば以外にありません。(國分美生)